



マイスコープ

上越市 金子俊彦



ノゴマ
2005年5月12日
妙高市池の平
発見者 妙高市 豊田忠雄

昨年の5月、渡りの途中のノゴマと激減種のアカモズの写真を撮ることができました。ノゴマのノドの赤は感動ものでした。

アカモズ
2005年5月21日
上越市関川河川敷



新潟市関屋海岸保安林の鳥相

新潟市 伊藤 泰夫

【立地条件と環境】

新潟市関屋海岸保安林（北緯 37 度 55 分、東経 139 度 1 分、標高 10m）は新潟市の中心部の西端すなわち西海岸公園の一隅にあり、佐渡を望む砂丘にクロマツを主体に帯状に植栽された防風、防砂および保健保安林として市民の生活に重要な役割を果たしてきている。また、この林は鳥類にとっては繁殖や生活の場として利用され、とりわけ春秋の渡りの季節にはメジロ、ヒヨドリなど多くの小鳥類が通過、滞在していくことが知られている。

この林より約 150m 隔てて日本海の海岸線が並行して走り、内陸側には住宅地や商業地を控え更に信濃川や商、工業地を経て低湿地（鳥屋野潟）や水田など広大な越後平野に続いている。一番近い山地は南西約 30km の角田山（標高 481m）である。このような環境条件のため旧新潟市一帯を通過する鳥類の多くはいきおい海岸部に残された狭い緑地帯（海岸林）に集まり通過していく傾向が見られる。新潟市は冬季大陸からの北西の季節風の影響を強く受けるが、対馬暖流のため比較的温暖で積雪量は内陸部に比べてごく少な

い。夏は高温多湿であるが春秋は温暖で月平均降水日数は春季 11 日 秋季 14 日である。

海岸林は幅約 100 - 200m、長さ約 4 km の細い帯状でクロマツ（樹齢 30 - 50 年、樹高 15 - 20m）が優占し、ニセアカシアなどが混生する。また公園の西端（関屋分水側）には海浜植物園が造成され、海浜固有の植物や木道のある草原はヒバリなどの繁殖地となっている。林内は鳥の種子散布等によるとみられるヤマザクラ、シロダモ、エノキ、シュロやヒョウタンボク、グミ、コマユミ、キイチゴ、ヤツデ、アオキ、カクレミノなど小鳥の好む実をつける低木やヨウシュヤマゴボウのような丈高草本も多く、特に近年は密生して藪状になり、里山のような景観を呈してきた。これらは各種鳥類の隠れ場や餌場として利用されているものと思われる。

この林にはフェンスで囲まれた野鳥のサンクチュアリが新潟市によって 2 箇所設けられており、この他 13 箇所にわたって小鳥のための水場も作られ、“にいがた野鳥の会”（地元野鳥愛好家の団体）が管理清掃に当たっている。サンクチュアリへの一般の立ち入りは、現在新潟市主催の市民探鳥会の時等に限

られている。林内では 1987 年より環境省委託事業として山階鳥類研究所の指導を受けた地元バンダ（日本鳥類標識協会所属の有資格者）と協力者が鳥類標識調査を続けている。

にいがた野鳥の会は 1969 年創設以来当地を主なフィールドの一つとして多くの会員が野鳥の観察を続けてきた。この間蓄積された記録と標識調査の記録とを合わせ更に新潟市により 25 年以上続けられてきた市民探鳥会（案内役は



関屋海岸保安林の概観

にいがた野鳥の会) のデータから新潟市関屋海岸保安林の鳥相についてまとめてみた。

【鳥相の概要】

1969 年以來記録された鳥類は別表のとおりで、17 目 43 科 155 種にわたる。

種類数の最も多いのはスズメ目 (89 種) で、以下多い順にチドリ目 (17) タカ目 (8) カモ目 (7) コウノトリ目 (7) フクロウ目 (6) カッコウ目 (4) キツツキ目 (4) ペリカン目、ハト目、ブッポウソウ目、アマツバメ目 各 (2) アビ目、カイツブリ目、キジ目、ツル目、ヨタカ目 各 (1) となっている。科別にみるとツグミ科 16 種、ウグイス科 13 種、アトリ科 10 種、ヒタキ科 7 種、ホオジロ科 7 種、カモメ科 7 種 (以下略) となり樹鳥類が多い。本来海洋または海岸に見られる種で林内に生息しないものは次の 25 種である。つまり 130 種は林内に生息するものと思われる。

オオハム、ハジロカイツブリ、カワウ、ウミウ、マガン、ヒシクイ、オオハクチョウ、コハクチョウ、マガモ、シノリガモ、コチドリ、シロチドリ、ハマシギ、ミユビシギ、キアシシギ、イソシギ、アカエリヒレアシシギ、ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、カモメ、ウミネコ、アジサシ、コアジサシ、ウミスズメ

【標識調査で得られた珍希種】

標識調査で記録されたものは 9 目 26 科 88 種であるが、このうち野外観察によらず標識調査のみで確認されたものは次の 14 種である。これらは通常の観察では発見困難な潜行性や夜行性の種また識別困難な種などであり、貴重な記録となった。

ミゾゴイ、クイナ、チュウジシギ、コノハズク、アリスイ、シマゴマ、カラアカハラ、キマユムシクイ、カラフトムシクイ、カラフトムジ

セッカ、オジロビタキ、チョウセンメジロ、シロハラホオジロ、オオマシコ

【渡り鳥について】

次に季節移動性によって分類してみると、以下のようになった。

1. 留鳥 (R) 38 種 24.5%
2. 夏鳥 (S) 42 種 27.1%
3. 冬鳥 (W) 30 種 19.4%
4. 漂鳥 (SW) 18 種 11.6%
5. 旅鳥 (LW) 18 種 11.6%
6. 留鳥または漂鳥 8 種 5.2%
7. 冬鳥または漂鳥 1 種 0.6%

つまり、移動性の種が占める比率がかなり高い (留鳥を除いて 74.8%) といえる。

この中では夏鳥の割合が高い。一方繁殖については 32 種 (20.6%) が確認または其の可能性が考えられ、全体として少ないと思われる。この内訳は留鳥 20 種、夏鳥 8 種、漂鳥 4 種である。

なお、シロチドリとコアジサシについては繁殖に適した砂浜がほとんど消失したことにより、また、チゴモズやアカモズは生息環境などの変化により近年姿が見られなくなった。しかし、2005 年 7 月 31 日チゴモズは当地において巣立ちびな 4 羽をつれた親鳥 2 羽が再発見され、繁殖が確認された。前回の記録 (1984) 以来 21 年振りである。



野鳥の森 (サンクチュアリー)

1987年秋から2004年秋まで17年間(春、秋計33シーズン)の標識調査の結果、当地において捕獲放鳥した総数は125,670羽であるが、この内訳と優占種の主なものは次のとおりであった。

1. メジロ 68,777羽 (54.6%)
2. シジュウカラ (12,466 9.9%)
3. ウグイス (12,399 9.9%)
4. アオジ (3,507 2.8%)
5. カワラヒワ (2,469 2.0%)
6. ヒヨドリ (2,426 1.9%)
7. メボソムシクイ (2,253 1.8%)
8. ルリビタキ (2,032 1.6%)
9. センダイムシクイ (1,557 1.2%)
10. スズメ (1,482 1.2%)

上位3種(メジロ、ウグイス、シジュウカラ)が全体の75%を占め、特にメジロの放鳥数は全国一である。スズメ目が77種125,342羽と圧倒的に多く、スズメ目以外は11種328羽に過ぎなかった。ウグイス科の中のムシクイ類は希少種を含め5種記録され、センダイムシクイ、エゾムシクイ、メボソムシクイの3種の放鳥数を合わせると全体の3.8%を占める。メボソムシクイは北海道と京都で回収記録があり、亜種コムシクイの比率が高いものと考えられている。

また猛禽類のツミは1982年当林内で繁殖した記録があるが、近年数度にわたり捕獲放鳥された。(1999年秋、2002年秋、2003年春)この林が生態系の頂点に立つタカ類の餌場として利用されていることがうかがわれる。水辺の鳥のササゴイやカワセミ、アカショウビ

ンなどはサンクチュアリー内の池に生息するモリアオガエルやアズマヒキガエルなどに誘引された可能性が高い。

今までの標識調査により当地から放鳥され県外で回収されたものは12種、逆に県外で放鳥され当地にて回収されたものは8種を数えた。これによってその移動経路(渡りまたは分散)の一端が明らかになったのは次の13種である。

メジロ、シジュウカラ、クロツグミ、メボソムシクイ、ウグイス、アオジ、ヤブサメ、シロハラ、スズメ、ヒガラ、ヒヨドリ、モズ、ルリビタキ

これらの移動先(回収地)は北海道、北陸、山陰、九州の各地が多く、日本海岸沿いの渡りのルートがあるように思われる。

[渡り鳥とその保護]

国際間で定められた渡り鳥保護条約によると、当地で記録された155種のうち123種が対象になっていることがわかった。国際的にもこれら鳥類のための環境保全が求められているところである。

1. 日露渡り鳥条約(対象種287種中113種)
2. 日米渡り鳥条約(対象種190種中52種)
3. 日中渡り鳥条約(対象種227種中96種)
4. 日豪渡り鳥条約(対象種76種中12種)

一方、新潟県の指定した絶滅危惧種に関するレッドデータブックによれば、つぎのような希少種が含まれている。

1. 絶滅危惧II類(オオタカ、ミゾゴイ、チゴモズ、アカモズの4種)



林内の様子



探鳥風景



渡去を前にしたキレンジャク

2. 準絶滅危惧（ウミウ、マガン、ヒシクイ、ツミ、ハイタカ、ハヤブサ、コアジサシ、コノハズク、オオコノハズク、アオバズク、ヨタカ、サンショウクイ、コサメビタキ、サンコウチョウ、ノジコ、シノリガモの16種）

以上、合計20種が含まれており、いずれも環境の悪化には敏感な反応を示し生存がおりやかされるおそれのある種である。

新潟市の海岸にわずかに残されたこの松林には調査の結果が多年にわたり、種によってかなりの消長があるとはいえ日本産鳥類542種の28.6%にあたる154種が記録されている（チョウセンメジロは日本産に含まれない）。長年の間にはかつて繁殖していたが近年姿を見せなくなったものや、植生の変化やクロマツの樹高が高くなったことなどの影響を受け減少傾向をたどっているもの（クロツグミ）などがある。一方、今まで山地でのみ繁殖し当地では越冬だけとみられていたアオジやウグイスが繁殖するようになった。松林は規模が小さく都市公園として人の往来、犬



林内の様子



松林に飛来したコムクドリ

の散歩などの干渉も多く繁殖地としては貧弱であるが日本海岸に沿って北上、南下していく渡り鳥の中継地、休息地として重要な役割を果たしていると考えられ、現在は良好な環境を保っているといえる。

[心配されること]

新潟市によって計画されている道路建設は、この松林の伐採（幅30m、長さ200m余）を前提としている。このため鳥類を含めた生態系全体にとって環境の激変をもたらすものと考えられ、中止すべきである。たとえば、この松林で繁殖し日本の国鳥にも指定され一般市民の探鳥会でも人気の高いキジは地上性であるため、行動圏が分断され子育てに大きな支障が出る恐れがある。また夜昼間断ない交通の騒音と排気ガス、夜間の照明などが渡り鳥の休息地としての安寧を脅かすことになるのは必至と考えられる。

謝辞

本文をまとめるにあたり、長年にわたり貴重な記録を提供いただいた小松吉蔵氏はじめにいがた野鳥の会の方々には厚く御礼申し上げます。

（注）本分で言及した鳥類標識調査は法に基づき、関係行政機関に届け出、許可を得て実施していることを申し添える

新潟市関屋海岸及び保安林の鳥類

科	種名	標識記録	繁殖の可能性	季節移動性	備考
アビ科	オオハム			W	
カイツブリ科	ハジロカイツブリ			W	
ウ科	カワウ			R/SW	
	ウミウ			R/SW	新潟県準絶滅危惧種
サギ科	ミゾゴイ	*		S	新潟県絶滅危惧Ⅱ種
	ゴイサギ			R	
	ササゴイ	*		S	
	アマサギ			S	
	ダイサギ			SW	
	コサギ			R	
	アオサギ			R	
カモ科	マガン			W	新潟県準絶滅危惧種
	ヒシクイ			W	新潟県準絶滅危惧種
	オオハクチョウ			W	
	コハクチョウ			W	
	マガモ			W	
	カルガモ		*	R	
	シノリガモ			W	新潟県準絶滅危惧種
タカ科	ミサゴ			R	
	トビ		*	R	
	オオタカ			R	新潟県絶滅危惧Ⅱ種
	ツミ	*	*	R/SW	新潟県絶滅危惧種
	ハイタカ			R/SW	新潟県準絶滅危惧種
	ノスリ			SW	
ハヤブサ科	ハヤブサ			R	新潟県準絶滅危惧種
	チョウゲンボウ			R	
キジ科	キジ		*	R	
クイナ科	クイナ	*		S	
チドリ科	コチドリ			S	
	シロチドリ		*	R	
シギ科	ハマシギ			LW	
	ミュビシギ			LW	
	キアシシギ			LW	
	イソシギ			SW	
	ヤマシギ	*		R	
	チュウジシギ	*		LW	
ヒレアシシギ科	アカエリヒレアシシギ			LW	
カモメ科	ユリカモメ			W	
	セグロカモメ			W	
	オオセグロカモメ			W	
	カモメ			W	
	ウミネコ			R	
	アジサシ			LW	
	コアジサシ		*	S	新潟県準絶滅危惧種
ウミスズメ科	ウミスズメ			W	
ハト科	キジバト	*	*	R	
	アオバト			R/SW	
カッコウ科	ジュウイチ			S	
	カッコウ			S	
	ツツドリ			S	
	ホトトギス			S	
フクロウ科	トラフズク			R	
	コミミズク			W	

フクロウ科	コノハズク	*		SW	新潟県準絶滅危惧種
	オオハコノハズク	*		R/SW	新潟県準絶滅危惧種
	アオバズク	*		S	新潟県準絶滅危惧種
	フクロウ			R	
ヨタカ科	ヨタカ			S	新潟県準絶滅危惧種
アマツバメ科	ハリオアマツバメ			S	
	アマツバメ			S	
カワセミ科	アカショウビン	*		S	
	カワセミ	*		R/SW	
キツツキ科	アリスイ	*		LW/W	
	アオゲラ	*		R	
	アカゲラ	*		R	
	コゲラ	*	*	R	
ヒバリ科	ヒバリ		*	SW	
ツバメ科	ショウドウツバメ			S	
	ツバメ		*	S	
	イワツバメ		*	S	
セキレイ科	キセキレイ			SW	
	ハクセキレイ	*	*	R	
	セグロセキレイ			R	
	ピンズイ	*		SW	
	タヒバリ			W	
サンショウクイ科	サンショウクイ			R	新潟県準絶滅危惧種
ヒヨドリ科	ヒヨドリ	*	*	R	
モズ科	チゴモズ	*	*	S	新潟県絶滅危惧Ⅱ種
	モズ	*	*	R	
	アカモズ		*	S	新潟県絶滅危惧Ⅱ種
レンジャク科	キレンジャク	*		W	
	ヒレンジャク			W	
ミソサザイ科	ミソサザイ	*		SW	
イワヒバリ科	カヤクグリ	*		SW	
ツグミ科	コマドリ	*		S	
	シマゴマ	*		LW	
	ノゴマ	*		S	
	コルリ	*		S	
	ルリビタキ	*		SW	
	ジョウビタキ	*		W	
	ノビタキ			S	
	イソヒヨドリ		*	R	
	トラツグミ	*		SW	
	マミジロ	*		S	
	カラアカハラ	*		LW	
	クロツグミ	*	*	S	
	アカハラ	*	*	S	
	シロハラ	*		W	
	マミチャジナイ	*		LW	
	ツグミ	*		W	
ウグイス科	ヤブサメ	*		S	
	ウグイス	*	*	R	
	エゾセンニュウ	*		S	
	シマセンニュウ	*		S	
	コヨシキリ	*	*	S	
	オオヨシキリ	*		S	
	カラフトムジセッカ	*		LW	
	キマユムシクイ	*		LW	
	カラフトムシクイ	*		LW	
	メボソムシクイ	*		S	

ウグイス科	エゾムシクイ	*		S	
	センダイムシクイ	*		S	
	キクイタダキ	*		SW	
ヒタキ科	キビタキ	*		S	
	ムギマキ	*		LW	
	オジロビタキ	*		LW	
	オオルリ	*		S	
	サメビタキ	*		S	
	エゾビタキ	*		LW	
	コサメビタキ	*		S	新潟県準絶滅危惧種
カササキヒタキ科	サンコウチョウ	*		S	新潟県準絶滅危惧種
エナガ科	エナガ	*		R	
シジュウカラ科	コガラ			R	
	ヒガラ	*		SW	
	ヤマガラ	*		R	
	シジュウカラ	*	*	R	
メジロ科	メジロ	*	*	R	
	チョウセンメジロ	*		LW	
ホオジロ科	ホオジロ	*		R	
	シロハラホオジロ	*		LW	
	カシラダカ	*		W	
	ミヤマホオジロ	*		W	
	ノジコ	*		S	新潟県準絶滅危惧種
	アオジ	*	*	R	
	クロジ	*		SW	
アトリ科	アトリ	*		W	
	カワラヒワ	*	*	SW	
	マヒワ	*		W	
	ベニヒワ	*		W	
	オオマシコ	*		W	
	イスカ	*		W	
	ベニマシコ	*		SW	
	ウソ	*		SW	
	イカル	*		R/SW	
	シメ	*		W	
ハタオリドリ科	スズメ	*	*	R	
ムクドリ科	コムクドリ	*	*	S	
	ムクドリ	*	*	S	
コウライウグイス科	コウライウグイス			LW	
カラス科	カケス	*		R	
	オナガ	*	*	R	
	コクマルガラス			W	
	ミヤマガラス			W	
	ハシボソガラス	*	*	R	
	ハシブトガラス		*	R	
R: 留鳥 S: 夏鳥 W: 冬鳥 SW: 漂鳥 LW: 旅鳥					

巣立った子ツバメはどこへ？

～街並みで生活するツバメを追って～

南魚沼市 木下 弘

もうすぐ春、ツバメが渡ってきます。

巣造りして卵を産む。それを母さんツバメが2週間抱いて温めると、赤ちゃんツバメ誕生。父さん母さんいっしょにエサ運び。赤ちゃんも アツという間に大きくなり、およそ3週間で巣立つ。毎年たくさんの子ツバメたちは、どこへ行くのか？ふるさとを忘れずに戻って来るのか？私はこの謎を解くために、当時の環境庁からツバメを捕獲して調査をする許可を得て、六日町調査地区内から巣立った子ツバメがどこにもどってきたかを調査した。〈図-1〉

1977から1991年まで、六日町の調査地区内のツバメの巣で、合計6,908羽の巣立ち前のヒナ鳥（ふ化日から10日目）の脚に標識（No.付脚環）を付けて、自然状態で巣立たせた。

その結果、調査地区内に戻ってきた標識

ツバメは、♂183羽 ♀44羽。調査地区外で発見された標識ツバメは、♂1羽 ♀7羽だった。

調査期間中街並みの大きな変化もなく、ツバメの生息状況も安定していた田中町のツバメの生活について、標識調査でわかったツバメの生態について紹介する。

田中町1～8の建物で繁殖した六日町の調査地区内で標識した子ツバメ17羽の出身地を見ると、6羽が田中町生まれ。〔表-1〕

数年海で生育したサケが生まれ故郷の河川を遡上して産卵するのと同様に、田中町から巣立ったツバメの子も同じように、自分が産まれて巣立った田中町に戻ってきているという事実を確認できた。十三歳のオスツバメ坂戸仁と巡り合ったのも、偶然なことかも知れないが、地味な標識付け作業を継続して行ってきたご褒美だと思っている。

〔表-1〕六日町調査地区内から巣立ち田中町に戻ってきた17羽の生い立ち一覧表

生い立ちを示す名 姓町名 ・名は性	町名	巣立った建物の家主 (巣をかけた場所)	誕生日 (ふ化日)	一巣 雛数	♂♀ 雄雌
1 坂戸 仁	10 坂戸	柄沢憲治宅軒下梁上	79/6/4	5	♂
2 坂戸 進	10 坂戸	魚野川ホテル別棟壁	80/5/22	5	♂
3 田中花子	2 田中町	豊田 信一宅梁側面	81/5/23	4	♀
4 上二 健	6 上町二	永井 貢 宅雁木梁	82/5/16	5	♂
5 田中太郎	2 田中町	昭栄建設 宅店前柱	82/7/3	4	♂
6 田中次郎	2 田中町	長 君平宅軒下壁	83/5/16	5	♂
7 田中三郎	2 田中町	丸袋店舗宅蛍光灯傘	83/5/19	5	♂
8 田中四郎	2 田中町	野口正己宅車庫内側	83/5/20	6	♂
9 西田 元	8 西泉田	山口道夫納屋梁側面	83/6/16	5	♂
10 上一文子	7 上町一	佐藤 昭雄宅前巢台	84/6/4	5	♀
11 田中正子	2 田中町	大平豊店車庫梁側面	85/5/28	6	♀
12 上二 優	6 上町二	大谷欣一宅車庫側面	85/5/29	5	♂
13 西田 誠	8 西泉田	山崎祥一納屋梁側面	85/6/3	5	♂
14 坂戸 勝	10 坂戸	松井正敏宅車庫梁横	85/7/17	3	♂
15 上二 寛	6 上町二	今成喜一郎ビル裏側	86/6/10	3	♂
16 上一 勉	6 上町一	読売販売所前車庫梁	88/7/15	4	♂
17 八幡太郎	1 八幡	新潟日報車庫柱側面	89/5/31	6	♂

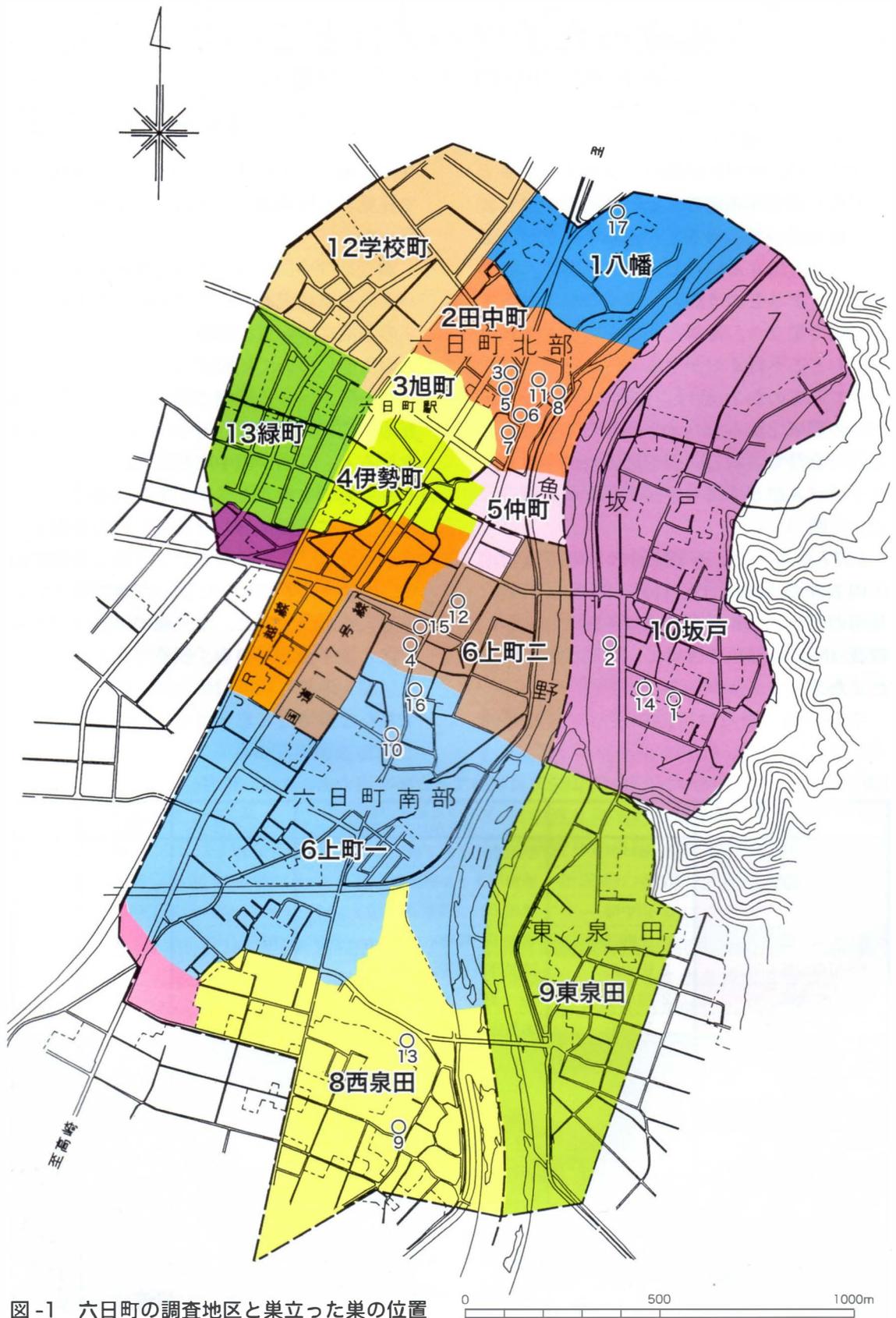


図-1 六日町の調査地区と巣立った巣の位置

〔表-2〕 六日町調査地内から巣立ち、田中町1～8の建物で繁殖（1回目繁殖①）したツバメの繁殖場所一覧

	田中町 1 大平畳店①	田中町 2 豊田信一①	田中町 3 曾根原宅①	田中町 4 伊藤工事①	田中町 5 昭栄建設①	田中町 6 新田家具①	田中町 7 金井豊治①	田中町 8 東北電力①
8 0 ♂ ♀	R 09294	R 09295						
8 1 ♂ ♀	R 09403	N 09352		N 桃 175	R 青 171			
8 2 ♂ ♀		R 09343 R 04131	坂戸進 [2] N 04130	N 04223	N 04381	R 09496		
8 3 ♂ ♀	N 04813	R 09496		田中花子 [2]		R 04704 R 09496		N 04791
8 4 ♂ ♀	田中太郎 [2]	坂戸仁 [5] R 04944	R 04976	坂戸仁 [5] R 04944				田中次郎 [1] N 09539
8 5 ♂ ♀	田中太郎 [3] R 04348	R09496	上二健 [3] N 青 201			田中三郎 [2] N 青 226		西田 元 [2] N 青 253
8 6 ♂ ♀	田中四郎 [3] R 青 228	N 青 262	西田誠 [1] N 青 260	上二優 [1] N 青 290			上一文子 [2]	
8 7 ♂ ♀	田中四郎 [4] N 645B		R334B	坂戸仁 [8]			坂戸勝 [2] 田中正子 [1]	上二裕 [1] N 379B
8 8 ♂ ♀	N 1406B R 645B	R 603B	N 1404B		就崎門灯上 阿部繁雄宅		坂戸勝 [3] R 334B	N 1493B
8 9 ♂ ♀	R 645B	R 603B	N 2096B		坂戸勝 [4]		坂戸勝 [4] R 603B	
9 0 ♂ ♀	R 1404B	坂戸仁 [11] N 2476B	R 1404B		坂戸仁 [11]		坂戸勝事故死 N 2778B	←車に轢かれ 90/4/12 に発見
9 1 ♂ ♀	上一勉 [3] N 2887B	坂戸仁 [12] N 2976B			坂戸仁 [12]		八幡太郎 [2] N 2977B	
9 2 ♂ ♀	上一勉 [4] R 2887B	R 3037B	N 3280B N 3279B		坂戸仁 [13] (電線に止まる 姿確認)			

◎毎年ツバメが来る建物は、〔ツバメのお宿〕

田中町で、ツバメがよく来た建物を選び、その12年間に繁殖したツバメたちの番関係を示した。〔表-2〕

六日町調査地区内で生まれ育ったツバメ17羽は、巣立った町名の色でどこ出身のツバメか、一見して分かる。もどってきた標識付ツバメを探す際、標識無しツバメには、新たにNo付脚環を付ける。(N-符号付ツバメ)

N-ツバメが、再び見つかった場合は、N→R(再捕獲)したことを記録。(R-符号付ツバメ)。田中町1・2・3・4の建物では、調査期間中毎年欠かさず早期にツバメが渡来して繁殖を行い、最初のヒナ巣立ち後、2回目の繁殖を行った。

しかし、田中町6の建物では、若ツバメやN-符号ツバメが遅れて繁殖し、2回目繁殖はしなかった。

前者のように、毎年ツバメが繁殖する建物を〔ツバメのお宿〕という。後者の建物で繁殖を行った若ツバメが、〔ツバメのお宿〕に、欠員ができると、その補充するかのよう〔ツバメのお宿〕に転居して繁殖を行う。



坂戸仁と名が付けた13歳♂ツバメ

朝日池探鳥会後の研究発表会



全体骨格



胸骨

2005年11月23日、上越市大潟区公民館で研究発表会が行われました。上記写真は発表者の中の1人で糸魚川市の鷺沢澄雄氏のスライドによる「ワシタカ類の体のつくりー骨格標本」の一場面。(写真は上越地区探鳥の会会報 No.1 より)

厳冬の寺泊探鳥会



2006年2月5日

上越地区に珍鳥ラッシュ！



モモイロペリカン 2005年10月3日
上越市関川河川敷 発見者 上越市 花岡佳代
撮影者 上越市 大原淳一



クビワキンクロの♀ 2005年11月27日
上越市大潟区朝日池 発見者 埼玉県の野鳥好き夫婦
撮影者 上越市 金子俊彦



サカツラガン 2006年3月20日
上越市頸城区 発見者 上越市 大原淳一
撮影者 上越市 金子俊彦



ハマヒバリ 2006年3月21日
上越市頸城区 発見者 妙高市 後藤利之
撮影者 上越市 大原淳一

発行 2006年3月31日 No.61

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒950-0941 新潟市女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002